



国指定重要文化財「安岡家住宅」(香南市香我美町)は平成24年度から保存修理事業をおこない、平成29年3月に主屋の保存修理が完成しました。今回の修理では調査により建物の歴史が明らかになり、後世に伝える文化財として構造補強や防災設備の整備も行いました。

写真「安岡家住宅主屋」(上 保存修理後 右下 修理前)

1. 安岡家住宅の保存修理事業 2
2. 県指定天然記念物 3
 - －奥工石山(竜王山)紅簾石珪質片岩大露頭部－
3. 竹ノ後遺跡－水路に眠る土器群－ 4
4. 土佐国分寺跡－伽藍を囲む築地堀－ 5
5. 秦泉寺廃寺跡 6
 - －古代寺院の南限溝や瓦・集落跡を確認－
6. 竹林寺－中世の建物跡や石積・近世初頭の寺地変遷－
7. 若宮ノ東遺跡－文字の刻まれた土師器皿出土－ 7
8. 高田遺跡－物部川河口に暮らした弥生・古代人－ 8
9. 高知城北曲輪－大量の廃棄された瓦－
10. 考古学から学ぶ史跡の見方 9
 - －埋蔵文化財センターの取り組み－
11. 土佐藩主山内家伝来の資料について 10
 - －高知県立高知城歴史博物館の所蔵資料－
12. 高知県の天然記念物－ムラサキオカヤドカリー－ 11
13. 四万十市の文化財 12
 - －不破八幡宮本殿保存修理工事竣工－
 - －四万十郷土資料館 リニューアルオープン－
14. 室戸市の文化財 13
 - －吉良川町 重要伝統的建造物群保存地区－
15. 文化財トピック 14
 - －日本遺産認定・高知HM講座－
16. 高知県の登録有形文化財 15
 - －竹村家土蔵・旧竹村呉服店(佐川町)－

裏表紙 掲載文化財一覧表 16

1. 安岡家住宅の保存修理事業

－香南市香我美町山北の重要文化財建造物－

安岡家住宅が重要文化財に指定されたのは平成17年7月のことです。土佐の郷土住宅を代表する貴重な建造物として、主屋、道具蔵、米蔵、釜屋の4棟が重要文化財に、^{つけたり}附として風呂場と雪隠の2棟と明治中期の古絵図も指定されています。四国の民家としては規模が大きく、中心となる主屋は2つの建物をつないだ独特の構成です。建物だけでなく、石垣、水路も含め屋敷地全体の残りも良く、江戸時代後期の郷土の暮らしぶりを今に伝えます。

安岡章太郎は小説『^{りゅうりたん}流離譚』で父親の生家を紹介、幕末から明治にかけて活躍した一族の歴史について描きます。この安岡家住宅こそが章太郎の父の生まれ育った家であり、小説に登場する家なのです。

安岡家が分家し当地に居を構えたのは明和8年(1771)、その後約250年の間、修理・増改築が繰り返されてきました。建物は時代により、その姿を大きく変えていきます。

主屋は築200年、大掛かりな修理の必要な時期になっており、それは差し迫った課題でもありました。保存修理事業が始まったのは平成24年のことです。今回の修復は建物のすべての材料を解体し、再び組み立てる「解体修理」です。平成29年3月には主屋が完成、防災や活用もあわせて平成31年度の事業完了まで8年にわたる大プロジェクトです。

建造物をどの時代の姿に復原するのか、調査をもとに文化財的価値や復原根拠など総合的に判断して時期が決定されます。主屋の場合、200年余りの間に13期の変遷が確認され、文政11年(1828)の姿に復原することになりました。

文化財建造物の保存修理では、建物の履歴を明らかにすること、文化財的価値を再評価することがとても重要になります。

建物が一般公開されるのは平成32年度からですが、保存修理の様子に触れることのできる「現場見学会」が、所有者さんのご協力で毎年開催されています。復原途上の建造物を見る機会はそう滅多にあるものではありません。修復を指揮する担当者のわかりやすい解説は、職人さんたちの大工道具実演体験コーナーとともに大好評で、「保存修理事業」とは何かを知っていただく良い機会となっています。(香南市文化財センター 松村信博)



大工道具実演体験コーナー



現場見学会・保存修理中の主屋



現場見学会・完成した主屋

2. 県指定天然記念物

— 奥工石山(竜王山)の紅簾石珪質片岩大露頭部 —

奥工石山(1515m)は、本山町の北部に位置しており、春はツツジ類が、秋には紅葉の楽しめる山として知られています。名前の由来は、飢えに苦しむ平家落人が、「この石が喰えるものならば」と嘆いたことに喰石山が転化したという説があります。平成22年に本山町と四国森林管理局が環境保全や生態系観察学習の場所として活用するために郷土の森保護協定を結びました。登山コース内ではブナ、トチノキ、サワガルミ等の広葉樹の大径樹が見られ、シャクナゲ、アケボノツツジの花も多数見られます。



奥工石山のシャクナゲ

奥工石山の紅簾石

紅簾石はマンガンを含む鉱物であり、顕微鏡下では淡桃～濃紅色をしています。山頂付近に露出した紅簾石片岩(圧力による変性作用を受けて発達したもの)と山頂付近の紅簾石を含む珪質片岩(※注)は、東西約500m、南北に300mの範囲で分布し、標高1400～1500m間にほぼ水平で分布すると推定され、層厚は100mをゆうに超えると考えられています。また、大露頭部は風化も進んでおらず、極めて新鮮な露出が続いており、世界的にも屈指の大露頭と言えます。この紅簾石片岩が形成された場所は、地下約15～20kmと考えられており、その後、隆起・浮上して上部に重なっていた地層が剥離されたため現在の地表に露出したとされています。



モニターツアーを開催

世界でも稀な結晶配列

奥工石紅簾石珪質片岩を構成する石英粒は、その主軸・副軸・副面が結晶学的にすべて同一方位に結晶化している極めて稀な結晶片岩です。地下深所(15～20km)で高い圧力と高温の下で変性した結果、このような特殊で稀な配列で固まったと推定されています。

これらの学術的価値などから、平成29年6月、県の天然記念物に指定されました。

※珪質片岩とはチャート(主成分は二酸化ケイ素(SiO_2)、石英)などの堆積岩を源岩とし、結晶片岩として合わさったものをいい、紅簾石を含む珪質片岩を紅簾石珪質片岩といいます。

(本山町教育委員会 上地 郁哉)



奥工石山 紅簾石珪質片岩大露頭部



奥工石山 紅簾石珪質片岩大露頭部
(遠景 竜王山登山口から撮影)

問い合わせ先

- ◎奥工石山登山について
本山町まちづくり推進課 0887-76-3916
- ◎紅簾石珪質片岩について
本山町教育委員会 0887-76-3913

3. 竹ノ後遺跡 –水路に眠る土器群–

調査にいたる経緯

南国市明見には「竹ノ後遺跡」のほか、土佐三大古墳の一つに数えられる明見彦山古墳群^{みょうけんひこやま}や狸岩古墳群^{たぬきいわ}が所在します。しかし、明見彦山古墳群を除く明見地区の遺跡は発掘調査がほとんど実施されていないため、明らかになっていない部分が多い状況です。「竹ノ後遺跡」についても、これまで本格的な発掘調査が行われたことがなく、遺跡の詳細は不明でした。

このような状況のなか、平成29年度、南国市上下水道局が実施する明見西ポンプ場建設工事に伴い、工事により破壊される範囲について記録保存のための本発掘調査を実施しました。



調査区全景



遺物出土状況

発掘調査の結果

今回の発掘調査では、溝跡(水路跡)7条、土坑9基、ピット53基を確認しました。その中でも、多くの遺物は調査区の北側で合流する2条の水路跡から出土しました。水路跡から出土した土器は完形に近いものが多く、弥生時代後期(約1900年前)を中心としたものです。

また、水路跡から絵画土器や漆を貯蔵していたと考えられる小壺が出土していて、これらは高知県内でも珍しい遺物です。特に漆の貯蔵壺は県内で初めての例であるとして話題になりました。



漆の貯蔵壺

まとめ

これまで明見地区では、発掘調査が少ないこともあって集落についてよくわかっていませんでした。ところが今回の発掘調査により、明見彦山古墳群が築造される約400年前に集落があった可能性がでてきました。土器が完形に近い状態で大量に水路から出土した要因ははっきりわかりません。可能性として、壊れたりして使えなくなった土器を廃棄したというよりは自然災害や祭祀など様々な要因が考えられます。

今後、調査成果の整理や周辺での発掘調査が進むことで、「竹ノ後遺跡」のより詳しい性格や明見地区の遺跡について明らかになっていくことが期待されます。

(南国市教育委員会 山崎美希)

4. 土佐国分寺跡 — 伽藍を囲む築地塀 —

調査にいたる経緯

土佐国分寺は、天平13年(741)に聖武天皇の「国分寺建立の詔」を受けて国ごとに建てられた古代寺院の一つで、現在の四国霊場第二十九番札所国分寺を中心とした範囲が大正11年に高知県で初めて国の史跡に指定されました。ところが、史跡範囲外にも伽藍が広がると分かったため、南国市教育委員会は史跡土佐国分寺跡の寺域確認調査を平成28年度から開始し、平成29年度には2回目の調査を行いました。



土佐国分寺跡空撮(北東から)

調査の成果

今回の調査の最も大きな成果は、伽藍を囲む北辺の築地塀の痕跡を確認したことです。その遺構は2条の並行する溝で、残存状態の良い地点ではその間に若干高まりが残っていました。2条の並行する溝は東西約150mに渡って延びており、そ



築地塀の痕跡

の東端は南へ直角に折れて、現在の国分寺東土塁の方へ向かっていることを確認しました。この2条の溝は、塀の両脇にある雨落ち溝の可能性が高く、築地塀が構築されていたと考えられます。築地塀は土を版築という工法で突き固めながら積み上げ、屋根をかけた構造の塀です。この重厚な区画施設を作ることで、寺院の宗教的空間を荘厳化して権威づける印象を持たせたことでしょう。これにより、土佐国分寺跡では南北約200m、東西約150mの範囲が中心伽藍として築地塀で区画されていたことが推定できます。

また、伽藍地の外側にも多くの柱穴や溝などが確認できたことから、周辺に寺の運営施設が広がっている可能性もでてきました。



伽藍地外の柱穴・溝

まとめ

全国60以上の地に国分寺が置かれ、全国で数多くの国分寺の発掘調査が行われてきています。しかし、その多くは中心伽藍に関するもので、周辺部の様相が分かっている例はあまり多くありません。そんな中で、今回の調査で古代土佐国分寺の周囲を取り巻く状況の一部が明らかとなったことは、非常に重要な成果です。

また、この調査で確認された遺構は、現在の地形、区画に沿うものが多く、今の地割が古代の景観を反映していると言えます。

(南国市教育委員会 油利崇)

5. 秦泉寺廃寺跡 – 古代寺院の南限溝や瓦、集落跡を確認 –

秦泉寺廃寺跡は高知市北部の秦地区^{はだ}に所在しており、昭和50年以降、今回まで8次にわたる発掘調査が実施されています。平成28年度の調査区では、飛鳥時代から奈良時代(7～8世紀)の掘立柱建物跡、竪穴住居跡、溝跡、柱穴などの遺構を検出しました。

掘立柱建物跡では、柱間が1.5m～1.8mで、梁間3.2m×桁10.4mの規模をもつ1×6間の大型の建物をはじめとする数棟の存在が推定されます。

竪穴住居跡は7世紀中期以前とみられる2棟以上が検出され、中にはかまどの痕と見られる橙色土層が確認できるものもありました。

調査区北部で検出したほぼ真北を軸方向とする大溝は、テラス状の段を有し、幅2.4m・深さ70cm以上の規模で、調査範囲は10m程の長さにも関わらず大量の瓦が発見されました。寺院創建時の素弁蓮華文軒丸瓦^{そべんれんげもんのみさまるかわら}やその系統瓦、鷗尾片^{しゅびへん}なども出土し、溝より南から瓦はほとんど出土しないこ

とから、溝は寺院の南限を示すものと考えられます。従来の調査を併せると、寺域は大溝を南限とし、南北125m×東西87m以上にわたることが確認できました。これ以南の建物は軸方向が一定せず、寺院関係の遺物も無いことから、性格は特定できませんが、豪族の居館や付属施設などが想定されます。

なお、7世紀中～後期の竪穴状遺構から出土した椀形の土師器杯は、畿内からの搬入品とみられ、官衙などの中央との関係が強い場所に出土が限られることから、当地の重要性をうかがうことができます。(高知市教育委員会 浜田・梶原)



調査区風景(南より)

出土した創建時の瓦



素弁八葉蓮華文軒丸瓦

6. 竹林寺 – 中世の建物跡や石積・近世初頭の寺地変遷 –

高知市五台山にある竹林寺は、平安時代後期の文殊五尊像を祀る四国霊場第三十一番の札所です。この度、堂舎の改築に伴い発掘調査が実施されました。

その結果、旧庫裡跡地からは13世紀末～14世紀の建物跡や溝、境界部の石積^{りゆうせん}などが検出されました。ここからは中国龍泉窯系の青磁碗や畿内系の瓦器といった各地の産物^{くわ}が出土しており、中世寺院の生活跡が確かめられました。さらに近世前期の層には、火災を示す炭化物や焼土があり、中国産の青花皿、志野焼^{しの}・織部焼^{おりべ}の向付などの高級品が含まれていました。

この火災後17世紀前葉には南側の傾斜地が大規模に埋め立てられ、敷地が拡張されています。

『山内家史料歴代公紀』によると、寛永20年(1643)正月の大火により開山堂などが焼失し、藩主・忠義の命により諸堂の再建がなされたとあり、今次調査の火災跡や敷地との関連が注目されます。

また境内を描いた寛政20年(1800)の『四国遍禮名所圖會』^{しこくへん ろめいしよずえ}には、現在は埋没した本坊南部の石段や段差部が描かれており、今回の調査で検出した17世紀以降の石積は、境内図の石段部分に関係した遺構の可能性が高いとみられます。

このように中世から近世にかけての竹林寺の歴史に、新たな知見が加えられたことで、今後進行する境内整備にも、この成果が活かされることが期待されます。(高知市教育委員会 浜田・梶原)



中世面の完掘状況(壁には焼土の層)
掘立柱建物跡や溝跡が確認できる

7. 若宮ノ東遺跡 – 文字の刻まれた土師器皿出土 –

若宮ノ東遺跡は平成28年度から本格的な発掘調査が始まり、2年目を迎えた今回の調査では弥生時代後期から古墳時代初頭の竪穴建物跡34軒が確認され、その多くは調査区の東側で集中して見つかりました。何軒かの建物跡は調査区外に続いており、周辺の試掘調査でも弥生時代の遺構が確認されていることから集落の範囲は東西300mを超える大規模なものになると考えられます。竪穴建物跡からは、人々が生活で使っていた壺・甕・鉢・摺石・石包丁・鉄鏃など多くの遺物が出土しました。なかでも特徴的なものは建物跡の柱穴に埋め込まれた弥生土器の甕です。これは建物を移る際に、柱を抜いた後の穴に土器が割れないよう丁寧に埋め込んだもので、何らかの儀式的なことが行われた可能性が考えられます。

またその他の時代では、古代の遺構も集中して見つかっています。掘立柱建物跡7棟と土坑が約6基確認され、掘立柱建物跡の柱穴や土坑からは多くの土器が出土しました。一つの柱穴から土師

器の皿が20点以上出土したのもあり、その中の1点『作』の文字が刻書された輪花皿りんかざら(※注)は県内でも他に出土例がなく貴重な資料となりました。その他にも土器とともに炭化米が出土した柱穴もあり、どちらも地鎮のための祭祀が行われたと考えられます。これらの掘立柱建物跡の周辺では他にも土師器の小皿・托・杯・羽釜、須恵器の杯・壺・大甕、緑釉陶器の椀などが出土しています。須恵器の大甕には内側に特徴的な文様があり、これは甕を形作る際に使われた道具の痕です。この文様は高知県では類例がないので他の地域から運ばれて来たことが分かります。緑釉陶器も他の地域から運ばれて来たもので、当時は高級品でした。これらの出土したものをみていると、発掘された掘立柱建物跡は周辺の有力者に関連のある建物跡の可能性が考えられます。

(埋蔵文化財センター 矢野 雅子)

※口縁部に規則的に切込みを入れ、丸みをもった花卉の花の形に似せて作られた皿



竪穴建物跡と掘立柱建物跡



『作』の文字が刻まれた土師器輪花皿



竪穴建物跡の柱穴に埋め込まれた弥生土器の甕



内側に特徴的な模様のある須恵器大甕

8. 高田遺跡 –物部川河口に暮らした弥生・古代人–

高田遺跡は物部川の河口に近い東岸に位置する遺跡です。平成27・28年度の調査では弥生時代の竪穴建物跡や奈良・平安時代の掘立柱建物跡を中心とした遺構とともに弥生土器や土師器、須恵器などの遺物が多く出土しており、弥生時代と奈良・平安時代を主体とした遺跡であったことがわかってきました。今年度の調査でも、同時代を中心とする遺構と遺物が出土し、さらに遺構の広がりが見られました。奈良・平安時代では掘立柱建物跡や土坑などが見つかるとともに、掘立柱建物跡は桁行3間(長さ4.3m)、梁行2間(長さ3.6m)の規模の大きさを測ります。さらにこの南側からは、東西方向に2間(長さ約4.3m)、南北方向に1間分の掘立柱建物跡が見つかっており、南側の調査区外に続いているものと思われます。

遺物では、奈良・平安時代のもので多く出土しています。素焼きの土器である土師器や土師質土器、須恵器がみられます。中でも、特徴のある遺物としては墨書土器が出土し、土師質土器碗の底部高台内に「㊦」または「㊧」と読める文字が施されています。(埋蔵文化財センター 筒井三菜)



高田遺跡V-2区完掘状態(上空より)



VII-2区 須恵器蓋出土状態

9. 高知城北曲輪 –大量の廃棄された瓦–

北曲輪は高知城跡のある大高坂山の北側に位置し、江戸時代の絵図には「御作事場」「御米蔵」「御武具蔵」など藩の施設がみられる場所です。

平成27・29年度に行った高知県保健衛生総合庁舎建て替えに伴う調査では、絵図に描かれていた溝跡が確認されたほか、明治7年の高知城を公園化した際の廃棄土坑も見つかりました。廃棄土坑からは多量の瓦が出土し、藩主山内家の家紋である三葉柏文の鬼瓦も見つかっています。また、大高坂山に近い箇所では、丘陵に沿って大規模な溝跡が3条検出されました。これらの溝跡は平安時代から室町時代にかけてのもので、江戸時代以前から高知城周辺が利用されていたこともわかりました。(埋蔵文化財センター 徳平涼子)



三葉柏紋の鬼瓦



大量の瓦が投げ込まれた土坑

10. 考古学から学ぶ史跡の見方 －埋蔵文化財センターの取り組み－

高知県立埋蔵文化財センターでは、平成29年度から新たな企画として調査員と遺跡を巡るツアーがスタートしました。「長宗我部元親の居城」・「佐川町不動ヶ岩屋洞窟遺跡」・「愛媛県松野町河後森城跡」・「高知市竹林寺」の4回が開催されました。「長宗我部元親の居城」と「愛媛県松野町河後森城跡」は高知県立埋蔵文化財センター発着で日帰りのバスツアー、「佐川町不動ヶ岩屋洞窟遺跡」と「高知市竹林寺」は現地集合・現地解散で行いました。

「長宗我部元親の居城」は、岡豊城跡、浦戸城跡、高知城跡の3城跡を城郭ライターとして活躍されている萩原さちこさんを講師に招き、一緒に歩きました。全国的なお城と比べて、岡豊城跡・浦戸城跡・高知城跡の魅力についても聞くことができました。移動中の車内でも山城談議が尽きず、普段聞けない話ばかりで参加者の皆様も満足していただけたのではないのでしょうか。

「佐川町不動ヶ岩屋洞窟遺跡」は夏休み期間でしたので親子で参加して下さった方が多かったです。「洞窟」という場所にも興味をひかれたようです。洞窟内ではスライドを使用して出土遺物や発掘調査の成果、不動ヶ岩屋洞窟で生活していた旧石器時代から縄文時代早期にかけての自然環境や暮らしぶりについても説明しました。炎天下での開催でしたが、洞窟内はひんやりとし、現代人が想像しているよりは暮らしやすかったのではないかと思います。実際に洞窟内に入らなければ

実感できないことです。また、合わせてワークショップを開催しました。ワークショップでは滑石を使用して磨製石鏃などを作ってもらいました。

「高知市竹林寺」では名勝に指定されている庭園・宝物館・発掘調査された場所などを見学しました。近年の発掘調査では旧金堂の礎石・旧三重塔跡が確認されています。調査時のエピソードを交えた説明は興味深く、発掘調査の成果は古絵図に描かれていた竹林寺の姿と重なります。今回は巡っていませんが、五台山には竹林寺跡の痕跡がいたるところに残されています。

実際の遺跡には写真や図面では伝えきれないことが多くあり、古代人が五感を通して感じ取った雰囲気のようなものは、実際に遺跡に立つことでしか得られません。遺跡を残していく重要性を強く感じました。

今後も、埋蔵文化財センターでは遺跡見学を開催しますので、一緒に歴史を体感しませんか。くわしくは埋蔵文化財センターホームページ(<http://www.kochi-maibun.jp/>)をご覧ください。

(埋蔵文化財センター 久家 隆芳)



高知市竹林寺



長宗我部元親の居城 岡豊城 詰ノ段



長宗我部元親の居城 岡豊城 三ノ段

11. 土佐藩主山内家伝来の資料について — 高知県立高知城歴史博物館の所蔵資料 —

高知県立高知城歴史博物館は、平成29年(2017)3月、高知城追手門の目の前に、新しく開館した博物館です。博物館の所蔵資料の中心は、土佐藩主山内家に伝わった歴史資料と美術工芸品で、およそ6万7千点にのぼります。

周知のように、山内家は、戦国時代から安土桃山時代に、一豊が豊臣秀吉のもとで活躍し、関ヶ原の戦いの後、土佐国の新国主として土佐に入国しました。江戸時代を通じて、土佐一国を治める土佐藩の藩主家として存続し、幕末には「四賢侯」の一人に数えられる容堂を輩出しています。江戸時代、幕藩体制のもとでは、20万石の知行を認められる、外様の国持大名でした。明治維新後は、近代社会の中で侯爵家として存在しています。

このような戦国大名・近世大名・侯爵家としての性格に由来し、山内家資料には、大名家として揃えるべき大凡の道具類が伝わっています。表道具・奥道具などの侯爵家の生活に由来するもの、他の大名家との交際・交流に由来するもの、土佐藩の政治や社会に関するもの、近代華族制度における大名家のあり方に関するものなど、時代的には戦国時代から昭和戦前期まで(16世紀~20世紀)、内容・分野的には古文書・古典籍・美術工芸品・古写真など、多岐にわたっています。

このうち、古文書は総数約3万点で、旧大名家に伝わったまとまりのある資料群として、全国に知られています。徳川將軍家発給文書・江戸幕府発給文書・土佐藩政関係文書など、幕藩体制下における大名家のあり方を知る上で、好個の資料群です。



重要文化財 長宗我部地検帳

美術工芸品には、書跡・絵画・武器武具・漆芸品・茶道具・染織品・能狂言面など、およそ5千点が伝わります。国宝の古今和歌集巻第二十(高野切本)や重要文化財の太刀備前国長船兼光などの国指定文化財も含まれています。



牡丹唐草蒔絵十種香箱

この他に、中国・四国地方を代表する和書・漢籍の古典籍群約2万点、ガラス板写真や戦前の高知県内の風景写真を

含む古写真約1万点などが伝わっています。

第2次大戦の終戦直後、高知県の文化復興のため、山内家から当時の県立図書館に一部の資料が寄贈・寄託されました。以来およそ70年の時が流れ、山内家に伝わった膨大な歴史資料群は、高知城歴史博物館で一括して収蔵・保管される体制が整いました。山内家資料のこれからの可能性に、改めて全国から注目が集まっています。(高知城歴史博物館 副館長兼企画課長 横山和弘)



能装束 雲龍文段替り厚板



千草・百草の内 千草



山内一豊肖像

12. 高知県の天然記念物 —ムラサキオカヤドカリ—

オカヤドカリは陸上で生活しているヤドカリです。卵から孵化した後、プランクトンとして海で一定期間を過ごして変態し、貝殻を背負って上陸します。名称は、オカヤドカリという単一の種を指す場合と、オカヤドカリ類(属)を指す場合があります。国の天然記念物はオカヤドカリを含む日本産オカヤドカリ属7種で、高知県で確認されているのはムラサキオカヤドカリです。ただし、温暖化でナキオカヤドカリがいずれ定着するかもしれません。

オカヤドカリが国の天然記念物に指定されたのは1970年。きっかけは、1968年6月に本土に復帰した小笠原諸島でのオカヤドカリの減少とされています。続いて1972年5月に沖縄地方が沖縄県として本土に復帰しました。当時、沖縄にはたくさんのおカヤドカリがいたようで、捕獲し、販売していた人たちがいました。復帰前は日本の法律が適用されていませんから、オカヤドカリの捕獲に制約がなかったのです。

そこで復帰後、沖縄県の一部の人たちに限り、

季節を定めての捕獲・販売が認められるようになりました。

ここまででお分かりのように、オカヤドカリ類は暖かい地方の動物です。1970年当時、九州以北にオカヤドカリ類がいることはおそらく想定されていなかったのでしょうか。室戸市にオカヤドカリがいることは1977年ごろから細々と伝えられてきていましたが、2015年に県下の生息実態がほぼ明らかになりました。東は室戸市ですが、西は黒潮町、四万十市、土佐清水市、大月町で集団が確認されました。集団の数は宮崎県のそれをはるかに上回り、九州以北では群を抜いています。室戸市では「おこぜ」「きーきー」、大月町の柏島では「ほうがに」と呼ばれていたようですが、地方名があることはかなり昔からいたことを伺わせます。1946年12月21日に昭和南海大地震が発生しましたが、おそらくそれより以前に高知県に定着しており、人知れず生き続けてきたのだらうと思われます。(高知県文化財専門委員 町田吉彦)



サザエを利用していたムラサキオカヤドカリ (おそらく県下で最大個体)

日本国内に生息するムラサキオカヤドカリは国指定の天然記念物です。天然記念物の捕獲や採取は法律で禁じられています。絶滅の恐れのある生物などをまとめた『高知県版レッドリスト(動物編)』に室戸市の個体群が絶滅のおそれありとして掲載され、個体数の減少が懸念されています。

13. 四万十市の文化財

－不破八幡宮本殿保存修理工事竣工－

不破八幡宮は一條氏が造営したと伝わる建築で、現在の本殿は永禄2年(1559)に再建されたものです。バランスのとれた三間社流造さんけんしゃながれづくり(※注1)や臺股かえるまた(※注2)に見られる繊細な彫刻に、室町末期の特徴が現れており、昭和38年に国の重要文化財に指定されました。また、秋に行われる例大祭は「神様の結婚式」と呼ばれ、地域で親しまれています。



不破八幡宮本殿

平成27年度から29年度に

わたり、約20年振りに屋根の全面葺替ふきかえと漆塗や彫刻彩色の塗り直し等を行いました。本殿の屋根は「こけら葺き」といい、薄く割った板材を少しずつずらし重ねて葺いています。また彫刻彩色は、僅かに残る顔料の精査や下地補修を丁寧に行うことで、色鮮やかによみがえりました。

現在でも永禄期の当初材を多く残し当時の姿を保っているのは、修理に際して伝統的な工法を用い、必要最小限の修理を積み重ねて地域で大切にされてきたためです。皆さんも、ぜひこの機会に足を運んでみてください。

(四万十市教育委員会 川村慎也)

- ※1 「流造」は屋根の前の方が長く伸びて、向拝を覆う神社建築様式です。その屋根を支える正面(桁行)の柱間が3間(柱が4本)ある造りを「三間社流造」といいます。
- ※2 社寺建築で梁や桁の上に置かれる部材で、カエルが足を広げたような形をしています。構造的な支柱や装飾されたものまで様々なものがあります。

－四万十市立郷土資料館 リニューアルオープン－

四万十市立郷土資料館は昭和48年の開館以来、歴史、民俗、地質、標本など10,000点を超える資料を収集し、市の歴史や文化を伝える施設として利用いただけてきました。この度、コンセプトも新たに、『川と人の暮らしを伝える資料館』としてリニューアルする計画で改修工事等を進めています。

今回の改修では、展示替えを継続できる動きのある資料館を目指し、館内では資料の適切な保存・活用ができる空調設備や展示ケース等の環境を整備します。また、安全・安心に利用いただくために耐震補強やバリアフリー化を進め、3階展示室まではエレベーターもご利用いただけるようになります。

展示は階ごとにコンセプトを設けて行います。当館は6階建てですが、1～3階を展示室とし、4、5階を準備室及び収蔵庫に、6階を展望室として利用します。

資料館は平成30年3月10日に一部オープンし、1階と6階が開館します。続く平成31年2

月に全面開館する予定です。多くの皆さんの来館をお待ちしています。

(四万十市教育委員会 上岡真良那)



資料館鳥瞰図1階



資料館外観

14. 室戸市の文化財

—吉良川町 重要伝統的建造物群保存地区—

保存に関わる意識対策

室戸市では平成28年度から2カ年にわたり吉良川町の保存対策見直し調査を行い、ほぼ全戸に訪問・悉皆調査することにより住民意識の向上に努め、2年目の平成29年度には重伝建選定20周年記念式典も開催しました。その他に世代交代に伴う保存意識の継承問題を早期から醸成・解消するため、次世代を担う子ども達に自分たちの地区の町並みは全国においても特別であるとの認識を持たせるように努めています。例としては、放課後子ども教室において手作りした、地元になんだ季節の小物(和紙の鯉のぼり・備長炭の風鈴・笹の七夕飾り等)を町並みの特定物件等に飾りつけています。子どもの中にこういったキャリア学習や地域貢献することで、町並みの重要性を認識することができ、子ども達に関わることで、その親御さんたちは再認識することができていると感じております。さらに、そういった活動の際には各メディアへの発信も幅広く行っており、地域活動にインパクトを与えることと同時に町並みの広報もでき、それを見た地域の方々の意識向上にも繋がっています。



備長炭風鈴



和紙鯉のぼり

吉良川放課後子ども教室による町並み飾りつけ

活用について

平成28年度には多様化する観光客に対応するため、5カ国語表記の総合案内板・拠点施設サイン板を設置し、平成29年度には高知高専生が開発した観光案内アプリ「とさブラ」用bluetoothビーコン(無線通信発信機)を設置しました。多言語表記の看板は、さらに増加してくる外国人観光客に対する受け皿となり、ビーコンは他の重伝建地区に先駆けた設置となりました。目的としては町の隅々まで散策してもらうことだけではなく、新型機器を導入することにより外国人や若者にも興味をもってもらおうという効果を見込んでいます。

これからの事業としては、町並みのライトアップ事業も計画しており、有色のラインLED等でのライトアップにより、インスタ映え効果等による夜間来訪者の促進を図り、それに伴う定期的な地域イベントの開催や飲食業・宿泊業の起業も並行されることを期待しています。

(室戸市教育委員会 濱田朋樹)



5カ国語表記による総合案内看板



高知高専生による観光案内アプリ用ビーコン設置

15. 文化財トピックス

ー日本遺産認定ー

森林鉄道から日本一のゆずロードへ
ーゆずが香り彩る南国土佐・中芸地域の景観と食文化ー

平成29年4月20日、中芸5町村(奈半利町、田野町、安田町、北川村、馬路村)が申請したストーリーが日本遺産に認定されました。平成27年度には四国四県で申請した「四国遍路」が認定されていますが、県単独の認定は今回が初めてとなります。

認定されたストーリーは「南国土佐の東に位置する中芸地域。かつて西日本最大の森林鉄道が駆け巡った中芸は、林業に代わる産業としてゆず栽培に力を注ぎ、今や日本一の生産量を誇っている。木材を運んだ森林鉄道の軌道は、ゆず畑の風景広がる「ゆずロード」に生まれ変わったのである。

川沿いや山間に広がるゆず畑を、小さくかわいい白い花、深く鮮やかな緑の葉、熟すとともに濃くなる黄色の果実が季節ごとに彩る景観。ゆず寿司などの風味豊かな郷土料理。中芸のゆずロード

をめぐれば、ゆずの彩りに満ちた景観と、ゆずの香り豊かな食文化を堪能することができる。」です。

認定されたのは、今はなき森林鉄道の軌道跡が日本一のゆず生産を誇る中芸地区の輸送路となり、現在も生き続けていることが評価されたものと思われます。



日本遺産認定式

ー高知ヘリテージマネージャーサポーター養成講座ー

歴史文化遺産活用推進員・支援員の養成

養成講座の目的は、歴史的建造物等、現在も地域に数多く残る歴史文化遺産の保全と活用が求められている中で、将来予測される南海トラフ地震に備えた対策が必要となっています。しかし、それらを担う人材の育成が急がれており、歴史文化遺産への理解等を深める養成講座を開設し、ヘリテージマネージャー(歴史文化遺産活用推進員)とヘリテージサポーター(歴史文化遺産活用支援員)を養成することを目的としています。

平成27年度から(公社)高知建築士会とともに高知ヘリテージマネージャー・サポーター養成講座実行委員会を設置して開催し、本年度で3年目となり、ヘリテージマネージャー課程の修了生は当初の目標であった50名を平成28年度にほぼ達成し、29年度(第3期)で79名に達しました。

修了生は、平成28・29年度の二カ年計画で行われている室戸市吉良川町重要伝統的建造物群保存地区の見直し調査、安芸市土居廓中重要伝統的建造物群保存地区のデザインコード調査、さらに国登録有形文化財建造物候補物件の意見具申に向けた調査に従事しており、平成30年度の第92回

諮問分の候補物件4件すべて、高知ヘリテージマネージャーが携わっています。

また、平成30年度からは、重要文化的景観に選定されている四万十川流域と久礼の港と漁村町の重要構成要素となっている集落等で、建造物の特定作業(記録保存を含む見直し調査)が予定されており、まず、津野町(12集落)が国庫補助を受け実施する計画です。重要構成要素になっている集落は5市町(四万十市、四万十町、中土佐町、津野町、橋原町)で35カ所あり、長期間の調査が想定されます。(高知県教育委員会 廣田佳久)



実測演習(竹林寺書院)

16. 高知県の登録有形文化財

－竹村家土蔵・旧竹村呉服店（佐川町）－

国の文化審議会（会長 馬淵 明子）は平成29年11月17日（金）開催の同審議会文化財分科会の審議・議決を経て、新たに188件の建造物を有形文化財として登録するよう文部科学大臣に答申を行いました。

この結果、高知県関係では佐川町竹村家土蔵で1件、同町旧竹村呉服店（店舗及び表蔵・主屋・土蔵）で3件の合計4件が登録され、高知県の登録有形文化財の（建造物）は全部で276件となります。今回の答申物件はいずれも高岡郡佐川町東町甲で、歴まち地区である上町地区に所在し、旧竹村呉服店は重要文化財竹村家住宅の西隣です。

（1）竹村家土蔵

明治後期の建築で国土の歴史的景観に寄与しているもの（登録基準1）で、答申されました。

建物は佐川町上町地区に建つ、切妻造二階建ての土蔵で、西側に下屋が付き入口となり、妻面と背面に水切瓦をそれぞれ三段、二段設け、外壁は海鼠壁で軒まで塗込めています。内部は二室に分かれ、いずれも板敷きとなります。比較的大きな土蔵で、地域の特色を良く示す外観となっています。



竹村家土蔵

（2）旧竹村呉服店

文政11年（1828）頃の建築で、国土の歴史的景観に寄与しているもの（登録基準1）で答申されました。

建物は、主屋の南、街路側に建ち、外壁は海鼠壁で、表蔵は四半貼りとなり特徴ある外観を呈しています。店舗部は木造二階建て、西寄りに畳敷きの店、中央部を土間、東の表蔵部は土蔵造り二階建てで、屋根は一体で掛けています。



旧竹村呉服店店舗・表蔵

主屋

安永6年（1777）頃の建築で、造形の規範となっているもの（登録基準2）で答申されました。

建物は木造二階建ての旧呉服店の主屋で、屋根は棧瓦葺きとなり、道路側に妻を向けいます。一階は西側に床を置き、二列三室となり、東側に土間を配しています。北六畳の間は古式を残し、長押を廻していません。



旧竹村呉服店主屋

土蔵

明治中期の建設で、国土の歴史的景観に寄与しているもの（登録基準1）で答申されました。

建物は、敷地の北西隅に建つ二階建ての土蔵で、屋根は置屋根となり、庭と一体となった敷地景観を創り出しています。

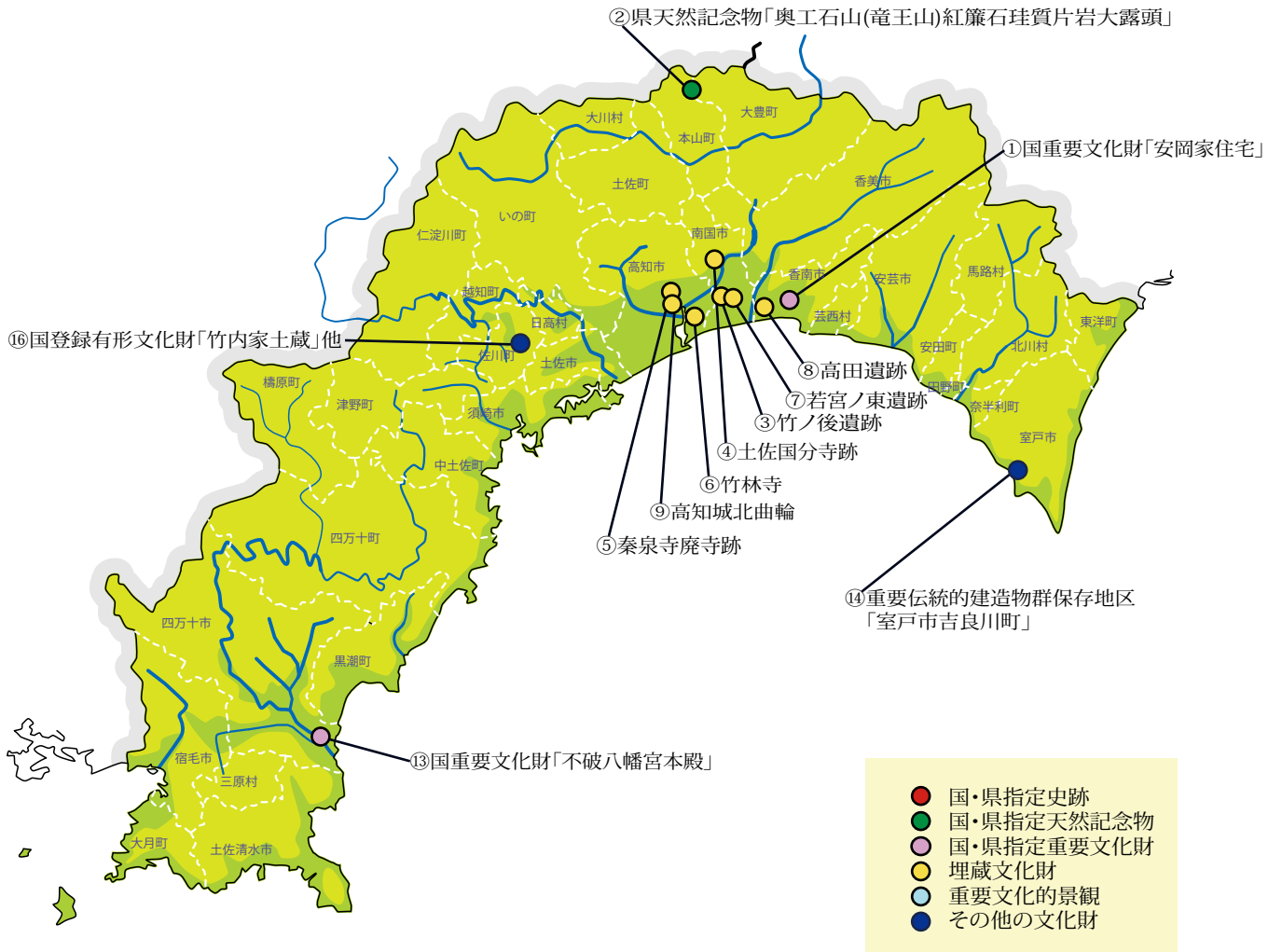
外観は庭に面する東・南面は漆喰塗であるが、西・北面は一部板張りとなっています。



旧竹村呉服店土蔵

（高知県教育委員会 廣田佳久）

掲載文化財位置図



みんなで守ろう文化財

文化財こうち 第4号

平成30年3月31日

編集・発行 高知県教育委員会文化財課

〒780-0850 高知県高知市丸ノ内 1-7-52

印刷 株式会社 飛鳥